

『一歩、踏み出す勇氣』

横須賀市立常葉中学校 三年 米倉理可

午前五時すぎ。静かに夜が明け、空全体が薄い空色に染まりはじめる頃、目が覚めた。かすかに遠くの方で小鳥の愉快なさえずりが聞こえる。そして、朝日が昇り、今日もまた長く、苦しい「我慢の一日」がはじまることを知らせる。中学校二年生だった私に。

身支度を整え、家を飛び出す。バスに揺られ、いつものバス停で降り、徒歩で学校へと向かう。歩いている時、孤独を感じると共に心無しか自分の視線が前後左右に細かく動いているのにふと気づく。同級生がどこからか私を見て笑っているのではないかと想像するだけでも息が出来なくなるほどの恐怖に無意識のうちに心が怯えていた。学校に着き、上履きに履き替えて、一階の廊下を通りかかる先生方と挨拶を交わす。階段を上がり、四階の教室への重い歩をゆっくりと進める。

「どんなに嫌でも入らなきゃ・・・学校を休んでしまったら、私の学校での居場所が消えていく・・・もつと悪口を言われる・・・」

とそう、いつも心に言い聞かせ、目立たないように後ろから教室に入る。私が入った瞬間、数人の視線がこちらへと向く。その時、一瞬、時が止まったように感じられた。身震いがして素早く椅子に座る。その日も男子に醜い悪口を言われ、教室の中での評価が下がり、それが女子にも広がる。耳に悪口が入ってくる度に胸が締め付けられて、深く傷つきました。居場所が消える……。あの頃の私は、誰かにいじめのことを打ち明けることもなく、学校では、ほとんどの時間を独りで過ごしました。ただ一秒でも早く一日が過ぎ去ってくれることを願っていました。私は、独りで夜に泣いている時いつも心の中で「誰か助けて下さい……。苦しいよ……。私は、このクラスに居ない方がいいのかな……。なんで生まれてきて、今ここに存在しているの……。」と必死で助けを求め叫んでいた……。でも、誰も手を差し伸べてはくれなかった。だが、ある日、自分の口から自分の言葉で自分の思いを伝える、つまり自分の足で「一歩、踏み出す勇気」こそが消えない傷みを希望の光へと変えるのだと思った。私は、いじめのことを勇気を振り絞って父に言いました。すると、「いじめた子の名前を言いなさい。先生に電話するから。苦しかったよな、ごめんな。」と言い、私を我慢の日々から救ってく

れました。母も私をぎゅつと抱きしめて、「気付いてあげられなくてごめんね。」と私に優しい言葉をかけてくれました。あの今まで我慢してきた苦しみから解放された時、私は、肩の力がスーと抜け、同時に自然と大粒の涙がこみ上げてきて、大声で喉が枯れるまで泣きました。嬉しくて・・・嬉しくて・・・私は、今生きている・・・と実感しました。そして、改めて、「いじめ」は、私のようにいじめられる側の人生までも狂わせてしまい、時には、「死」にまでも追い込んでしまうことの恐ろしさを強く感じました。お父さん、お母さん、先生の見えない所で子供は、深く傷ついています。心配かたたくないから、特にお父さん、お母さんの前では強がっています。子供の「心の声」をしつかりと聞いて受けとめてあげてください。

私は、このいじめから色々な事を学びました。いじめは、どんな理由があろうと許されるものではない。だから次は、私がいじめと戦っている子を父が私を救ってくれたように救い、希望に満ちた笑顔を取り戻したいです。絶対に救います。

「生きる意味なんてない。あなたが生まれてきたのは奇跡。お母さんが生んでくれたときから今ここにあなたは生きている。泣かないで、くじけないで、前を向こう。まずは、今日を精一杯に生きよ

う。」と声をかけてあげたいです。私は、今、前と同じ午前五時にオレンジ色に輝く太陽が昇るのを見つめながら、「お父さん、私をいじめから助けてくれてありがとうございます。お母さん、私を生んでくれてありがとうございます。」とつぶやき、命の重さは皆同じなんだと思った。

「みんな違ってみんないい」ことを皆が認めることが出来た時いじめは、無くなると思います。無くなります。

「きつと・・・」という言葉を信じて。